

Ulysses における視覚芸術

—— 演劇と写真を中心に ——*

岩下 いずみ

序

本論において演劇と写真を「視覚芸術」とするが、これは演劇についてジェイムズ・ジョイス (James Joyce) 自身が “Drama is essentially a communal art and of widespread domain.”¹ と述べていることに基づき、また写真については、黎明期に19世紀当時のヨーロッパ中流家庭が求めた肖像画の代替品として写真が発展したという側面に着眼している。さらに後半で *Ulysses* (1922) の主人公ブルーム (Bloom) の娘ミリー (Milly) が写真店で働いていることに触れるので、それにも関連がある。*Ulysses* では主に父から息子への継承にスポットが当てられている。しかしブルームの夭折した息子ルドルフ (Rudolph) ではなく娘ミリーへの遺伝的形質の継承に本論では注目したい。その手がかりが演劇と写真という視覚芸術である。

I

Ulysses において言及される演劇作品についての研究は多い。しかし、本論で取り上げるアメリカ人作家オーガスティン・デイリー (Augustine Daly) 作 *Leah, the Forsaken* (1862, 以下 *Leah* と略記) を中心に取り上げた研究はあまりない。*Leah* はブルームの亡父ルドルフ・ヴィラーグ (Rudolf Virag のち Rudolph Bloom に改名) が見たことのある作品として *Ulysses* に登場する。*Leah* はもともとユダヤ系ドイツ人作家サロモン・ヘルマン・モゼンタール (Salomon Hermann Mosenthal) 作 *Deborah* (1849) を元に英語で執筆された作品である。ブルームは街角の看板で *Leah* がその夜公演されることを知り、かつて父が観劇の思い出を語ってくれたことを思い出す。その際、作品に出てくるユダヤ人の悪役ナタン (Nathan) がかつて裏切ったユダヤ人グループの長老であるアブラハム (Abraham) に詰め寄られ、ユダヤ人への裏切りを責められる場面の一部が

* 本稿は、2017年10月に日本英文学会中国四国支部第70回大会で発表した内容に加筆修正を加えたものである。

¹ Joyce, James. “Drama and Life.” *Occasional, Critical, and Political Writing*. Ed. Kevin Bally (Oxford: Oxford University Press, 2000) 26.

引用されている。

Hello. Leah tonight: Mrs. Bandmann-Palmer. Like to see her in that again. Poor papa! How he used to talk about Kate Bateman in that! . . . By Mosenthal it is. Rachel, is it? No. The scene he was always talking about where the old blind Abraham recognizes the voice and puts his fingers on his face.

Nathan's voice! His son's voice! I hear the voice of Nathan who left his father to die of grief and misery in my arms, who left the house of his father and left the God of his father.

Every word is so deep, Leopold.

Poor papa! Poor man! . . .²

ルドルフがハンガリー出身のユダヤ人で、また作品がリア (Leah) という悲劇のユダヤ人女性が主人公であることから、*Ulysses* で Leah を取り上げる際、こうしたユダヤ性に考察が集中しているようである。しかし、Leah 全体のプロットと登場人物を知ると別の要素があると考えられる。Leah の簡単なプロットは次の通りである。18世紀初頭オーストリアのある村にリアたち流浪のユダヤ人たちがたどり着く。リアは村の治安判事の息子である男性ルドルフ (Rudolf) と恋仲になり、二人はそれぞれのコミュニティを捨てて新天地で結ばれようとする。しかしルドルフにはすでに結婚を期待されているマダレナ (Madalena) がおり、父親は非キリスト教徒との結婚を許すはずもない。悪役である村の牧師ナタンはユダヤ人であることを隠して生活しており、自らの出自が知られることを恐れてリアたちを追い払おうと画策する。ルドルフは、リアが金を渡され引き下がれば、彼女との結婚を諦めると約束する。ナタンはリアの仲間であるユダヤ人女性に金を渡し、リアが金を受け取ったことにする。リアが金を受け取ったと知らされたルドルフは失望し “I loved you, you sold me for money”³ とリアに語り、マダレナと結婚する。裏切られ失意の Leah は村を去る。数年後、再び村を訪れた Leah はマダレナとその娘「リア」に出会う。ルドルフはリアを捨てた後悔の念から、ユダヤ人の人権回復を求めて活動を続けており、皇帝に嘆願に出かけてい

² Joyce, James. *Ulysses*. Ed. Hans Walter Gabler, Wolfhard Steppe, and Claus Melchior (New York: Random, 1986) 5. 194-209. 以下の引用はすべてこの版に拠り、本文中に略号の *U* と共に挿話番号と行数を記載する。

³ Daly, Augustin. *Leah, The Forsaken: A Play, in Five Acts (Classic Reprint)*. (London: Forgotten Books, 2015) 33.

るところであった。帰宅したルドルフとリアとしばし再会し、リアは彼を許し再び立ち去る。

このように作品には、リアと恋仲になる非ユダヤ人の青年としてブルームの父ルドルフと同名の人物が登場するのである。しかしこの一致は作品で言及される事は一切ない。ブルームの父ルドルフが息子に語って聞かせたのは、先ほどの引用にあるようにルドルフが観劇した当時の主演女優ケイト・ベイトマン (Kate Bateman) の美しさである。リアは美貌のユダヤ人女性として非ユダヤ人たちからその魔術的な美しさや誘惑という観点で語られる。*Leah* という劇作自体大衆向けの悲劇だったので、主演女優の担う役割は大きかったことが推察される。故に *Leah* 観劇について語る際、主演女優に焦点を当てることは不思議ではない。それをもってしても、やはりルドルフという名前の一致には何かが隠されているように感じられる。*Leah* におけるルドルフは非ユダヤ人である。愛していた女性を捨てた悔恨の念から、ユダヤ人の地位向上を目指して皇帝に謁見するなどの活動をし、自分の娘にはリアと名付け、かつて自分が捨てた女性リアに許される。一方ブルームの父ルドルフはハンガリー出身のユダヤ人で、イギリスを経てアイルランドに移住し、ユダヤ教徒から改宗してプロテスタントとなり子供をもうけた人物である。その後エニスのザ・クイーンズ・ホテルを所有したが、そこで服毒自殺している。

こうして追っていくと、二人のルドルフには名前以外の一致点はさほど見られないようである。しかし今までの *Ulysses* 研究における *Leah* のユダヤ性、それにまつわる父子の関係のみへの着眼に対して、この名前の一致には新しい研究の可能性が示されているのではなからうか。ジョイス自身が *Leah* を実際に観劇したかは不明であるが、当時人気があり1908年には映画化もされていたこと、また徹底的なリサーチをして作品に投影する彼の執筆姿勢から、ジョイスが *Leah* のルドルフという登場人物について見過ごしていた、もしくは *Ulysses* の主人公ブルームの父であり重要人物と言えるルドルフへの投影が全くない、とは考えにくい。また二人のルドルフにまつわるわずかな一致点として、皇帝謁見のエピソードがある。前述した通り、*Leah* のルドルフはユダヤ人の地位向上を目指す活動の中で皇帝に会って作品の結末部分で帰郷する。*Ulysses* のルドルフについては、第17挿話で “his grandfather having seen Maria Theresia, empress of Austria, queen of Hungary” (U 17. 1909-10) とされている。ルドルフ自身が謁見したのではないにしろ、“first reminiscence had he [Bloom] of Rudolph Bloom (deceased)” (U 17. 1905) の中でこうした言及があることは、ジョイスが *Leah* のルドルフから何らかのアイデアを得たと考えられるのではないだろうか。

II

そこで本論において、二人のルドルフに共通するのは、親子間の継承であると提起したい。二人はユダヤ人か否かの違いはあるものの、お互いに父親の存在、親子間の継承を重んじている人物である。Leah のルドルフは父親の説得に従いマダレナと結婚し子供をもうける。Ulysses のルドルフはしばしばブルームによって親子間の継承と結びつけて連想される。

RUDOLPH

... Are you not my son Leopold, the grandson of Leopold? Are you not my dear son Leopold who left the house of his father and left the god of his fathers Abraham and Jacob?

BLOOM

(with precaution) I suppose so, father. Mosenthal. All that's left of him. (U 15. 258-64)

Ulysses 第15挿話の夢幻劇のような場面においてルドルフが登場して、ブルームの不甲斐なさを非難する場面である。ブルームはこれに対して“Mosenthal. All that's left of him”と曖昧な返答をする。先に述べた通り、モゼンタールは Leah の元になった Deborah のユダヤ系作家である。ブルームがユダヤ性を通じた血統の話題でユダヤ女性を描いたリアを想起するのは当然である。また、“Mosenthal. All that's left of him”をユダヤ人の血を引き継いでいるという意味に読むこともできるだろう。しかし一方でブルームが自らのユダヤ性に対してアンビバレントな言動をする場面が同じ第15挿話にある。ブルームは“I was at Leah, Mrs Bandmann Palmer. Trenchant exponent of Shakespeare. Unfortunately threw away the programme.” (U 15. 497-99) と述べ、グリーン夫人 (Mrs Breen) に *King Lear* を見に行ったとごまかしている。訳注では、ブルームは故意に事実をごまかしているとの指摘があるが、⁴なぜ彼が Leah ではなく、*King Lear* を見に行くと言ったのか。単純に、大衆向けメロドラマではなくハイカルチャーとみなされるシェイクスピア劇を見に行くとして高尚な趣味を誇示したかったのかもしれない。しかし Leah はユダヤ性が押し出された悲劇で、受難のユダヤ人が描かれている。ダブリンでユダヤ人として認知されているブ

⁴ ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』II, 丸谷オ一・永川玲二・高松雄一訳 (東京: 集英社, 1996) 451.

ルームがその劇を見ること、興味を持っていることを隠そうとするのには彼のアイデンティティの複雑さがあることは想像に難くない。「ユダヤ人の母親から生まれた子はユダヤ人である」というユダヤの律法を踏まえると、母親がユダヤ人ではないブルームはその意味ではユダヤ人ではない。彼自身ユダヤ教徒としての習慣を実行していない。にもかかわらずブルームは周囲にユダヤ人として見なされる。これについては、ユダヤ人であるかどうかの判断が一種の社会装置であるという指摘もある。⁵

ブルームが引き合いに出す *King Lear* において、リア王 (King Lear) は善良な末娘コーディリア (Cordelia) を財産相続において勘当し、長女と次女に裏切られ流浪の身となる。和解したリア王とコーディリアはしかし、処刑され死んでしまう。ルドルフをカギとして両作品を再考察すると、領地継承を通しての財産相続、親子間の継承というテーマも *Leah* と *King Lear* に共通している。戯画的とも言える狂気に走るリア王の姿は、前にあげた夢幻劇における Rudolph の時代錯誤かつ戯画的なユダヤ老人の姿 “A stooped bearded figure appears garbed in the long caftan of an elder in Zion and a smokingcap with magenta tassels. Horned spectacles hang down at the wings of the nose” (U 15. 248-50) とも通じる。

Ulysses のルドルフは自殺してしまうが、その血筋はブルームからルーディ (Rudy, Rudolph の愛称)、ミリーへと継承されてゆく。ルーディは1893年に生まれ11日で亡くなってしまいが、ミリーは1991年に生まれ作品の舞台となる1904年には15歳にして自立しており、マリンガーの写真店で働いている。写真というキーワードもまた親子間の継承に重要な要素として関わっている。“Milly’s tubbing night. American soap I bought: elderflower. Cosy smell of her bathwater. Funny she looked soaped all over. Shapely too. Now photography. Poor papa’s daguerreotype atelier he told me of. Heredity taste.” (U 8. 170-74) と、第8挿話でブルームは娘ミリーの幼い日の入浴を思い浮かべ、今彼女が写真を生業としていること、そこから自殺した父ルドルフのダゲレオタイプアトリエ、そして継承された趣味を連想する。このアトリエは、ルドルフではなく、そのいとこステファン・ヴィラーグ (Stefan Virag) がハンガリーに所有していたものであることが第17挿話の “An indistinct daguerreotype of Rudolf Virag and his father Leopold Virag executed in the year 1852 in the portrait atelier of their (respectively) 1st and 2nd cousin, Stefan Virag of Szesfehervar, Hungary. (U 17. 1875-77) という記述で明らかとなる。この場面ではまた、ルドルフとその父レ

⁵ 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン (5)」法政大学紀要 (56) (2008) 27.

オボルドが1852年に撮影したとされる不鮮明なダゲレオタイプ（銀板写真）1枚にも言及されている（U 17. 1885-36）。こうしてブルームの遺伝的形質に写真への傾倒があること、ルドルフを思い出す上で演劇や写真が主要な要素として働いていることがうかがわれる。ブルームが幼い頃に用いた亡き父のオペラグラスへの言及 “I saw at her night toilette through illclosed curtains with poor papa’s operaglasses”（U 15. 3365-66）があるが、これも父と演劇をつなぐアイテムである。さらに、“Remind you of the voice like the photograph reminds you of the face. Otherwise you couldn’t remember the face after fifteen years, say”（U 6. 966-68）というブルームの考え方も彼の視覚への傾倒への強いことを裏付けている。

III

その遺伝的形質を継承しているミリーは第1挿話でスティーヴン・デダラス（Stephen Dedalus）の友人たちの会話に“Photo girl”として登場する。

- Down in Westmeath. With the Bannons.
- Still there? I got a card from Bannon. Says he found a sweet young thing down there. Photo girl he calls her.
- Snapshot, eh? Brief exposure. (U 1. 683-86)

“Snapshot, eh? Brief exposure.” というセリフには、当時一般化しつつあったスナップショット（スナップ写真）の台頭が背景にある。ダゲレオタイプは特に初期には10～20分と一定の時間対象が静止していることが必要であり、費用もかかり機材も大掛かりなものであったのに対し、20世紀初頭に一般化が始まったスナップショットは、ダゲレオタイプのように時間を必要とせず、「短時間露出」が可能となった。アイルランドでは、ダゲール（Louis Jacques Mande Daguerre）が1839年に発明したダゲレオタイプをごく早い時期に取り入れ、写真はアイルランド大衆にとって急速に身近なものになっていった。これはダゲールがアイルランドでのダゲレオタイプの特許を取得していなかったためで、1841年にはダブリンのロタンダ（The Rotunda）にアイルランドで最初のダゲレオタイプスタジオがオープンした。⁶ スティーヴンの友人、マリガン（Mulligan）と

⁶ Rockett, Kevin, and Emer Rockett. *Magic lantern, Panorama and Moving Picture Shows in Ireland, 1786-1909*. (Dublin: Four Courts Press, 2011) 47. 以下の引用はすべてこの版に依り、本文中にページ数を記載する。

ヘインズ (Haynes) の会話に出てくる「短時間露出」は、出会ってすぐ交際を始めるような関係とスナップショットの即時性に引っ掛けたユーモアであるかと考えられる。ルドルフの時代のダゲレオタイプから、ミリーの時代のスナップ写真という移り変わりには、写真技術の発展、対象の変化という近代文化における視覚・技術の変容・進化が現れている。ダゲレオタイプが担った中流家族の肖像としての側面から、スナップショットが担ったもっと気楽な観光記念などの大衆向けスナップ写真の側面に移行しているという捉え方もできる。また、ダゲレオタイプの特許という点において、ヨーロッパにおけるアイルランドの特異とも言えるポジションも表されているだろう。

アイルランドは、ダゲレオタイプ導入の時点から奇しくもヨーロッパ本土やイギリスよりも写真技術やその発展において、抜きん出ている部分があったと言える。ダブリンを拠点としトリニティ・カレッジ (Trinity College) の教授でもあったジョン・ジョリー (John Joly) はカラー写真の発展に寄与し1896年にはアイルランドで初めてX線写真を撮った人物として知られる。これはヴィルヘルム・レントゲン (Wilhelm Conrad Röntgen) がX線写真の発見を報告したわずか6週間後だった。その他ダブリンのアップパー・サックヴィル通りに1896年にオープンしたローレンスイズ・フォトグラフィック・ギャラリーズ (Lawrence's Photographic Galleries) を含めダブリンに多数あった写真スタジオを初めとして、コークやベルファストにもスタジオがあったこと (65-66) は、当時のアイルランドに写真が普及していたことを示している。ミリーがマリナーの写真店で働くという設定も、こうした背景があつてこそだろう。女性であるミリーが早くから独立して両親から離れて生活しているというアイルランド女性の社会進出、アイルランド地方都市の発展を表す部分でもある。

ミリーの写真店での仕事は順調であり、バノン (Bannon) という青年と交際していることは、第4挿話に出てくるミリーからブルーム宛ての手紙にも言及されている。

I am getting on swimming in the photo business now. Mr Coghlan took one of me and Mrs. Will send when developed. We did great biz yesterday. . . . There is a young student comes here some evenings named Bannon his cousins or something are big swells and he sing s Boylan's (I was on the pop of writing Blazes Boylan's) song about those seaside girls. (U 4. 400-09)

Ulysses では主に父から息子への継承にスポットが当てられているが、夭折した息子ルーディではなく娘ミリー、すなわち祖父から娘への継承もあることが写真に関わる職業から知ることができる。ブルームはどうかと言うと、彼がステイヴンに妻モリー (Molly) の写真を見せ、ブルーム宅での「知的研究」の一つとして “Snapshot photography” (*U* 17. 5589) が示されている。また第18挿話のモリーの独白においては、尼僧が映っている “the smutty photo” (*U* 18. 22) をブルームが所有していることが語られる。

ミリーはモリーのミニアチュアとしてしばしばブルームによって言及される。モリーもそれを認めてはいるが、第18挿話においては、ブルームがミリーに写真を習わせたがったのは、自分とボイルン (Boylan) に浮気させるにはミリーが邪魔だったからという理由と合わせ、ブルームがミリーに祖父ルドルフの後を継がせたがったのだという理由を挙げている点は興味深い。

... indeed the Lord knows still its the feeling especially now with Milly away such an idea for him [Bloom] to send the girl down there to learn to take photographs on account of his grandfather instead of sending her to Skerrys academy where shed have to learn not like me getting all 1s at school only hed do a thing like that all the same on account of me and Boylan thats why he did it Im certain the way he plots and plans everything ... (*U* 18. 1003-09)

また、“I noticed he [Bloom] was always talking to her lately at the table explaining things in the paper and she pretending to understand sly ofcourse that comes from his side of the house” (*U* 18. 1017-19) と、ミリーの「抜け目のなさ」もブルームの血筋だとモリーは考えている。ブルーム側からは、前述した “heredity taste” から写真を通しての遺伝的形質の継承が示唆されるものの、写真を学ぶため職業学校にミリーを通わせ写真店で働くようにしたことがブルームの家系を継がせたかったからだとは特に語られない。これはモリーが感じていたブルームの無意識下の願望だったのかもしれない。

作品中ではルドルフの職業が何だったのか明示されることはなく、写真に携わる職業だったとも言明されていない。ハンガリーの写真スタジオもルドルフのいとこが所有していたものらしい。彼が何らかの事業に従事しておりエニスのホテルを買い取ったこと、そしてその事業が破綻し何らかの理由で自殺に至ったことのみがわかる。

The Queen's Hotel, Ennis, county Clare, where Rudolph Bloom (Rudolph Virag) died on the evening of the 27 June 1886, at some hour unstated, in consequence of an overdose of monkshood (aconite) selfadministered in the form of a neuralgic liniment composed of 2 parts of aconite liniment to 1 of chloroform liniment (purchased by him at 10. 20 a.m. on the morning of 27 June 1886 at the medical hall of Francis Dennehy, 17 Church street, Ennis) . . . purchased at 3. 15 p.m. on the afternoon of 27 June 1886 a new boater straw hat, extra smart . . . (U 17. 622-29)

以上の箇所から、自殺当日薬剤を午前中に購入後に帽子を購入している点など謎が残る自殺である。また、ブルームが1500ポンドの財産を所有しているという不自然な点にも同じ挿話で触れられている。ルドルフの自殺がブルームに保険金を相続させるための計画的なものだった可能性も示唆されているのだが、ルドルフの遺書の内容は明かされず、読者にこれ以上の情報は与えられない。

結

最後に、ここまで論じてきたルドルフとミリーがその姿を実際に見せることはなく、他者から語られる存在であることに着目したい。ミリーの場合はその手紙を通して、ルドルフの場合はブルームの夢幻劇で、想像上の人物として登場するのみである。本論では、演劇・写真という視覚芸術に仕組まれた遺伝的形質の継承に着眼して論を進めてきたので、この興味深いルドルフとミリーの扱いについて最後に考察したい。前述したように、ブルームはイメージ（像）、すなわち視覚情報がなければ記憶にとどめることはできないとしている。しかしルドルフとミリーというブルームが仲だちの存在となっている、彼にとって最も近い肉親二人は、写真や演劇という極めて視覚的な芸術に関連して語られるが、その姿は現さない。この事は作品に実際には登場しないルドルフとミリーを、二人をつなぐ視覚芸術によって印象付け、肉付けすると共に、作品における視覚芸術の重要性や、視覚芸術が作品にもたらす多層性を示唆していると考えられる。また同時に文学という言語芸術においては、登場人物は全て実際に姿を現わすことはないという特質もここで浮かび上がるが、こうした視覚芸術と言語芸術の差異を通しての考察については今後の課題としたい。

ここで、先に指摘した *Leah* と *Ulysses* における二人のルドルフの共通するエピソード、「皇帝謁見」について再び触れたい。父ルドルフが語った先祖の自慢話を聞いた幼いブルームの反応には、近代ヨーロッパにおける新しい生き方の一端が示されているように思われる。

“Leopold Bloom (aged 6) had accompanied these narrations by constant consultation of a geographical map of Europe (political) and by suggestions for the establishment of affiliated business premises in the various centres mentioned.” (U 17. 1911-15) という描写は、ルドルフから、彼の祖父が皇帝に謁見した話を聞いた幼いブルームが、事業展開においてヨーロッパ各都市に支店を作ることを提案する、という内容である。このエピソードから、ブルームが幼くしてヨーロッパに対する広い視野をあらわしていたことがうかがえるのではないだろうか。「事業展開においてヨーロッパ各都市に支店をつくる」ことをブルームが想起する時、写真館の支店をヨーロッパ各都市に拡大することを想定していたのかもしれない。

今まではほぼ指摘されることがなかった *Leah* と *Ulysses* におけるルドルフという名前の一致は、ユダヤ性の有無によって見過ごされて来たのかもしれない。しかしそこには視覚芸術を通して次のことが示されているのではないだろうか。それは、ユダヤ性にとらわれることのない、近代ヨーロッパにおける継承と、新しい「ヨーロッパ人」の誕生という *Ulysses* に隠された主題を解くためのひとつの鍵であると考えたい。その場合、近代ヨーロッパにおける継承を担うのは、ルドルフから遺伝的形質を受け継いだミリーであると結論づけられる。ブルームからルーディへ、そして次の世代への血統の継承はルーディが亡くなったことによりなされなかったが、ルドルフからブルーム、そしてミリーへの遺伝的形質の継承がなされていることには、新しいヨーロッパ人の誕生と未来が示されているのではないだろうか。

熊本高等専門学校

Visual Art in *Ulysses*: Focusing on Plays and Photographs

Izumi Iwashita

James Joyce strongly associates the play with art as he states in “Drama and Life.” Also, because of backgrounds in which photographs evolved instead of portraits in Europe in the 19th century, this paper defines plays and photographs as visual art.

In *Ulysses* (1922), Milly, the daughter of Bloom, works in a photo shop. Visual art such as plays and photographs serves as a clue to explore the inheritance of the genetic trait from Bloom to Milly. Bloom’s deceased father, Rudolf Virag (later changed his name to Rudolph Bloom), saw *Leah, the Forsaken*, a tragedy of a Jewish woman Leah. As for the study on relationship between *Leah* and *Ulysses*, a main point has been focused on Jewish nature because Rudolf is a Jew from Hungary. However, there is a character named Rudolf in *Leah*, a non-Jewish young man who is in love with Leah. This agreement of the name “Rudolf” will lead to a key to understand *Ulysses*.

From Joyce’s writing style thoroughly based on actual events and so on, it is clear that there is a projection of Rudolf in *Leah* on Rudolf in *Ulysses*. Both of them emphasize the succession between father and son: Rudolf in *Leah* marries a Christian woman according to his father’s will in order to maintain Christian bloodline, and Bloom often remembers Rudolf in relation with inheritance from father to son. On the other hand, Bloom’s identity is ambivalent because he isn’t defined as a Jew judged from a Jewish custom, but people regard him as a Jew. That is why he lies that he went to see *King Lear* instead of *Leah* presumably because he worries to be seen that he saw *Leah* in sympathy with a Jewish theme.

Rudolf in *Ulysses* committed a suicide, but its bloodline is inherited from Bloom to his daughter Milly who is independent at the age of 15 working at a photo shop. Rudy who inherited his grandfather’s name Rudolf lived only 11 days. The keyword “photograph” also represents an important element in the succession between parents and children. Rudolf’s memory of a daguerreotype atelier in Hungary and “heredity taste” regarding photographs are often emphasized. Milly inheriting Rudolf’s genetic trait appears as a “Photo girl.” Also, the setting that Milly works at the photo shop in Mullingar shows the

Irish women's social advancement at that time.

One of the main themes of *Ulysses* is the succession from father to son. However, Milly succeeds her father's bloodline on behalf of deceased Rudy because her occupation is related to photographs. In "Penelope," Molly points out that Bloom wanted Milly to learn photography to succeed Rudolf's occupation which seems to be relevant to photography. From Bloom's side, the inheritance of the genetic trait through the photographs based on the "hereditary taste" mentioned above is suggested. Rudolf's suicide seems to be a planned one to inherit insurance money to Bloom, and it can be said that the motif of inheritance between parents and children is also shown in Rudolf's mysterious suicide.

Here I would like to mention the common episode of Rudolf in *Leah* and Rudolf in *Ulysses*, "an audience with emperor." Young Bloom heard that Rudolf's grandfather had an audience with the emperor, and Bloom suggests to establish a branch in each European city for business development. This response of Bloom shows a new way of living in modern Europe, and that Bloom represents a broad perspective towards Europe at a young age. When Bloom imagines to make branch offices in each European city, he may have assumed that the branch of the photo gallery would be expanded to European cities.

From the agreement of name in *Leah* and *Ulysses*, one of the main themes of *Ulysses* can be traced, that is, the inheritance in modern Europe and the birth of the "new European" through visual art. In that case, it is concluded that Milly who inherited the genetic trait from Rudolph is responsible for the inheritance in modern Europe. A new European's birth and future is shown in the fact that the inheritance of genetic traits from Rudolph to Bloom, and Milly has been done.

National Institute of Technology, Kumamoto College